



Title	人文学としてのアルス：西洋における人文主義的芸術の系譜
Author(s)	齋藤，稔
Citation	大阪大学，1999，博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/41226
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	さい とう りのる 齋 藤 稔
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 1 4 7 7 6 号
学 位 授 与 年 月 日	平成11年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第2項該当
学 位 論 文 名	人文学としてのアルス ——西洋における人文主義的芸術の系譜——
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 神林 恒道
	(副査) 教 授 森谷 宇一 教 授 上倉 庸敬

論 文 内 容 の 要 旨

今日学問と芸術はそれぞれに区別されている。だがかつて学芸と技芸は「アルス」という概念でしか言い表わすことはできなかった。本論文は、この不可分に統合された学問と芸術の人文系の系譜を歴史的に跡付けようとしたものである。まず「第一章 古代ギリシャにおける芸術の成立とアイデアの表現」では、芸術の起源を神殿の祭儀に象徴される「諸芸術の共生」に求め、これを具体的な人間像の表現に即して分析し、そこから開かれてくるアルスの原点を明らかにしようとする。「第二章 古代ローマの現実世界の芸術表現」においては、アルスを現実主義的な方向へと展開させた古代ローマの芸術文化が取り上げられる。そこには現実との関わりを通じて感得された人間的なものの創造的表現が認められる。「第三章 中世のキリスト教美術における聖性の表象」では、こうした「人間性の探求」にキリスト教的信仰における聖性がいかに浸透していったかが論じられる。

ルネサンスになると、人文主義の名のもとに自覚的に、古代的な「人文学研究」の再興が唱道されるが、この理念に応ずる自由人の教養として組織化されたのが「自由学芸」である。「第四章 人文主義と自由学芸」では、論者はルネサンスの美的文化の創造の過程で、自由学芸のなかでもとくに重要な意味を持ったのが修辞学であると指摘する。この第四章と対応する「第五章 中世における生産と制作の技芸」では、アルテス・リベラーレスに対する手工芸的技芸であるアルテス・メカニカエが、想像力による隠喩を通じて自然の人間の再形成と見做され、そこから美的芸術へと成熟していく経緯が述べられる。

「第六章 人文主義的芸術文化の基礎概念」においては、この展開をガダマーの「美的フマニズム」の理論に基づき、近代的な教養概念の観点から芸術哲学的に解釈する。「第七章 隠喩の言語表現と造形的表象」では、言語表現と芸術表現を媒介する修辞学の隠喩の機能についての分析がなされる。そこから導出される形象の意味論的展開は、西欧の造形表現の基盤である「図像学」に見出だされる。ここまで一貫して追求してきたテーマは、西欧における「美的人文主義」の伝統である。この美のアイデアの観想に起源を有する古典的な規範的美学から、十九世紀から二十世紀にかけて、様式の美学への移行が生じてくる。最終章「第八章 アイデアの展相と人文学としての美術史研究」では、以後さまざまな形で展開してきた様式史の方法論に批判的に検討が加えられる。

論文審査の結果の要旨

本研究は実にさまざまな角度からの読み方と評価が可能な論考である。この研究はまず何よりもその表題が明らかに示しているように、「西洋における人文主義的芸術の系譜」を論者の該博な知識と膨大な資料を駆使して歴史的に跡付けようとしたものである。その研究の中心をなすのが、「アルス」の観念についての歴史的考察である。芸術学のこの分野でのわが国の研究は若干の翻訳を数えるのみで、オリジナルな研究と言え、論者の論考をおいて他に例を見ない。論者はこのアルスの理念が学芸と技芸の不可分な統合にあることを、従来の文献学的方法にのみよるのではなく、美術作品の解釈を引きつつ明らかにする。ここに象徴される「語ること」と「作ること」とが美的人間性の表現としてのアルスに結実するに至る重要な契機として、論者が着目したのが「修辞学」が内包する隠喩の機能であった。

ところでこの研究で古代から中世、ルネサンスそして近代を貫く時間軸を形成するのが、パノフスキーにヒントを得た規範的美学である。この軸線にそって、人間性の表現の歴史が「人文学としてのアルス」の問題へと読み込まれていく。なかでも論者が着目するのが、古代世界における「諸芸術の共生の美的作用」である。これこそが「人文主義的芸術」の理想の原点と見做されるからである。最終章では、このイデア的規範からの逸脱としての近代が抱える問題が、ヘーゲル以降の錯綜する様式研究の批判として論じられ、そこから再び論者の眼差しは、主題である「美的人間学」の実現としてのアルスの理想へと還帰していく。

本研究は一貫したテーマに基づいて周到に構築された論文であるとともに、またさまざまな角度から評価されうる内容を持つ。何よりもまずこれは、規模壮大な芸術学史研究の労作である。なかでも核心部をなす「アルス」についての緻密な資料読解と作品解釈からなる研究の成果は高く評価される。また近代的「アート」が拠って来る原点に立ち返っての「アルス」の意味についての問い直しにおいて、この研究は芸術学を越えたメタ芸術学的観点からする、迷走する芸術の現状に対する卓抜な警世の書と見做せよう。部分的になお整理を要するところがないわけではないが、それも本研究全体の価値ある内容と学界への多大な寄与という点から見れば本質に関わる問題ではない。以上述べてきたように、齋藤稔氏提出の学位申請論文「人文学としてのアルス ―西洋における人文主義的芸術の系譜―」は、主査、副査ともに一致して博士（文学）の学位を授与するに値する論文であると認定するものである。